

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

編集長 昆 吉則

どうなっているんだ災害列島日本

何という年なのだろう。日本中どこもかしこも災害列島の様相を呈した今年の日本。寒波、大雪、度重なる台風来襲、その反面での熱波と干ばつ、そして地震。

発生数だけでなく、その勢いも尋常でない気象変動は日本にとどまらず、世界中で起こっている。異常気象が語られて久しいが、我々はこれまでとは違う気象条件の下で農業に取り組んでいるということを肝に銘じるべきだろう。

1月から2月にかけて日本海側では何度も大雪に見舞われた。特に2月上旬には北陸地方で記録的な大雪となった。強い寒気が繰り返し流れ込んだため、12月から2月の3カ月間は全国的に平年より気温が低く、西日本では極端な低温に見舞われた。

1月22日から23日には関東甲信地方や東北地方太平洋側を中心に大雪となり、東京でも23cmの積雪を記録。その後、27日にかけて強い冬の気圧配置となつて非常に強い寒気が流れ込み、日本海側を中心に暴風雪や大雪となったほか、さいたま市で26日に観測史上最低のマイナス9・8℃を観測する

など全国的に顕著な低温となった。2月中旬には日本海側で大雪、3月になつても北海道で豪雪が続いた。

台風による被害もその数だけでなく、勢力の大きさにおいても異例だった。特に大きな被害をもたらしたもののだけでも、台風7号は台風が温帯低気圧に変わった後に梅雨前線を刺激し、西日本の広い範囲で記録的な大雨をもたらした。この大雨は広島県や岡山県などを中心に山崩れなどで死者200人を超える大災害をもたらした。東から西へと異例のコースで各地に被害を与えた台風12号。台風21号は近畿・東海・北陸・北海道を中心に記録的な暴風となった。最大瞬間風速は、全国927の風の観測点のうち、近畿で33、北海道で22、東海で21、北陸で12など、合計99の観測点で観測史上最大値を観測した。また、台風21号による高潮で関西国際空港が浸水して閉鎖されるとともに、関空と対岸を結ぶ連絡橋に暴風で流されたタンカーが衝突して旅行客や職員が停電で冷房の止まった関空に閉じ込められた。

大きな地震も頻発した。6月18日には大阪府北部でマグニチュード6・1（最大震度6弱）。大阪府内

で死者5名、2府5県で負傷者453名、住家の全壊12棟・半壊273棟・一部破損4万1459棟に及んだ。さらに、9月6日には北海道胆振地方中東部でのマグニチュード6・7（最大震度7）の地震が発生した。地震による山崩れほかで死者が41名に及び、震源に近い厚真町、安平町、むかわ町では多くの住宅が倒壊。道央地域を中心に道路などの損壊が相次いだ。この地震に伴って全道で停電が発生した。

熱波による水不足は水稻だけでなく、畑作などでも広く生じた。北海道での地震発生の前日、9月5日の未明から早朝にかけて台風21号が猛威をふるった。我が国の子実トウモロコシ生産をリードしてきた長沼町の柳原孝二氏のところでは台風の暴風で建設中だったトウモロコシ用のサイロが倒壊。それに加えての地震だった。同氏はそれにもくじけず再建に取り組んでいる。

各地で被害を受けられた読者の皆様にはお見舞いを申し上げるとともに、くじけず新たな経営に取り組まれることをお祈りしたい。

平均気温の上昇により「適地適作」も通用しなくなってきた。同様にこれまでの常識も通用しない。しかし、そんなときこそ農業経営者の意志と覚悟を失うべきではない。